

ピックアップ1

身近に起きているこんな事故

東京消防庁管内では、平成30年中に日常生活の中で起きる様々な事故により約14万4千人が救急搬送されています。ここでは、「指等を切断する事故」と、乳幼児の特徴的な事故である「窒息や誤飲の事故」の発生状況を取り上げました。

指等を切断する事故

1 年別救急搬送人員

平成28年から平成30年までの3年間で、727人が指等を切断する事故により救急搬送されています。平成30年は247人が救急搬送されています（図1）。

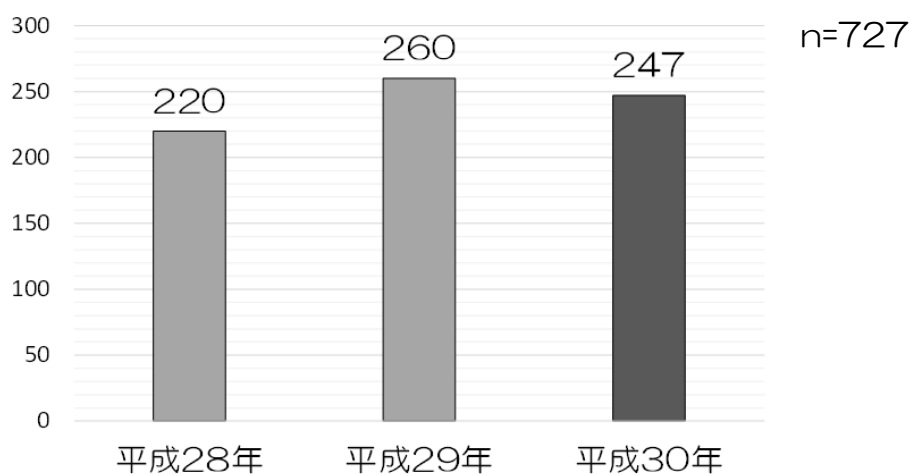


図1 年別の救急搬送人員

2 年代別救急搬送人員

40代が最も多く157人、次いで50代が129人となっており、20代から70代にかけて多くなっております（図2）。

また、0歳～4歳でも18人と乳幼児でも発生しており、保護者の注意が必要です。

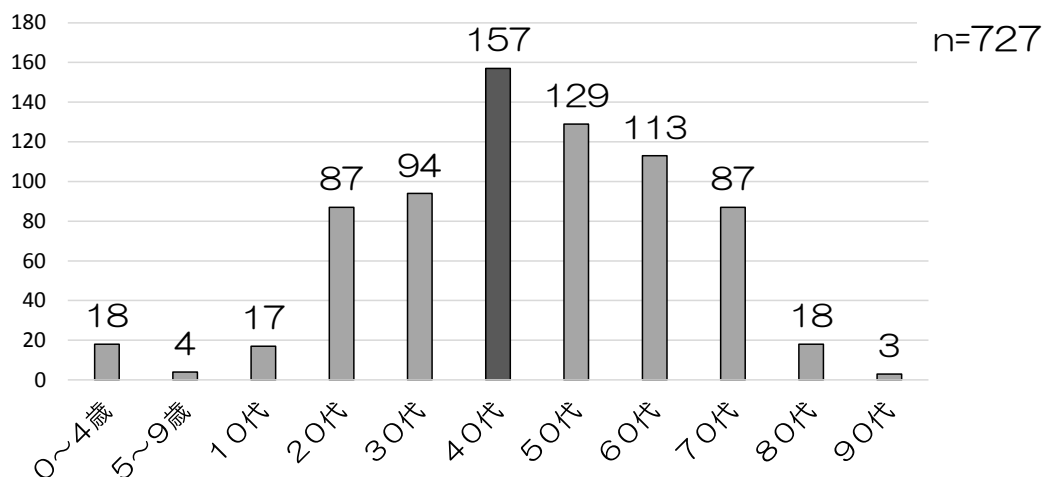


図2 年代別救急搬送人員

3 事故発生場所別の救急搬送人員

事故発生場所別の上位5か所をみると、工場・製造所・作業場が276人と最も多く、次いで住宅（専用・共同・寮・寄宿舍）が148人と多くなっています（図3）。

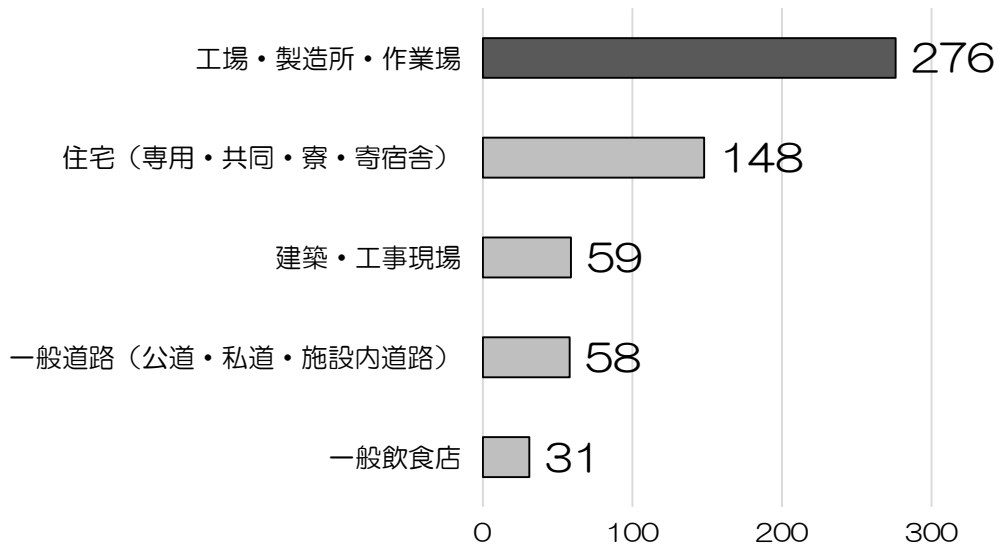


図3 事故発生場所別の救急搬送人員（上位5か所）

4 初診時程度別救急搬送人員

救急搬送時の初診時程度をみると7割以上が入院の必要がある中等症以上と診断されており、生命の危険が強い重症と診断されている事例もあります（図4）。

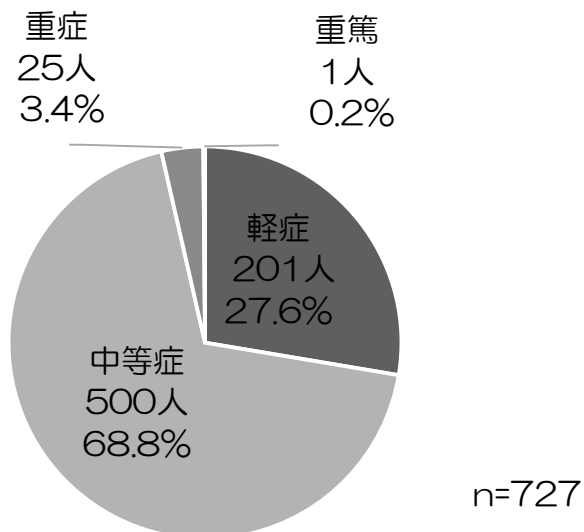


図4 初診時程度別救急搬送人員

5 関連器物別事故発生状況

関連器物別の事故発生状況（上位5つ）をみると、電気のコギリやプレス機などの機械によって受傷した人が364人と顕著に多く、次いで開き戸や引き戸などの開口部が61人、自動車などの車体が48人となっています（図5）。

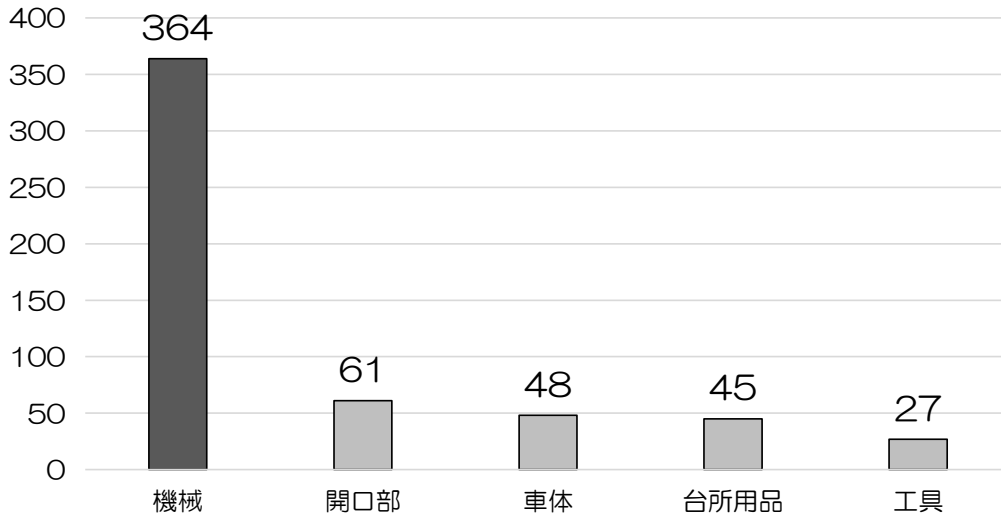


図5 関連器物別事故発生状況（上位5つ）

6 12歳以下の子供による事故

12歳以下の子どもに注目した関連器物別では、手動ドアなどの開口部で指等を切断する事故が顕著に多くなっています（図6）。

また、発生場所別では自宅が9件と最も多くなっており、自宅以外の外出先や幼稚園・保育園などでも多く発生していることがわかります（図7）。

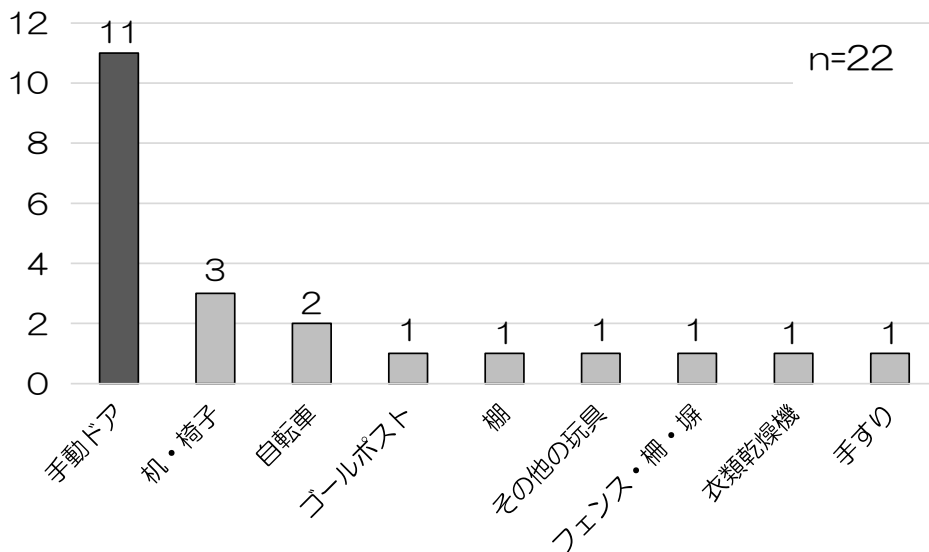


図6 関連器物別救急搬送人員（12歳以下）

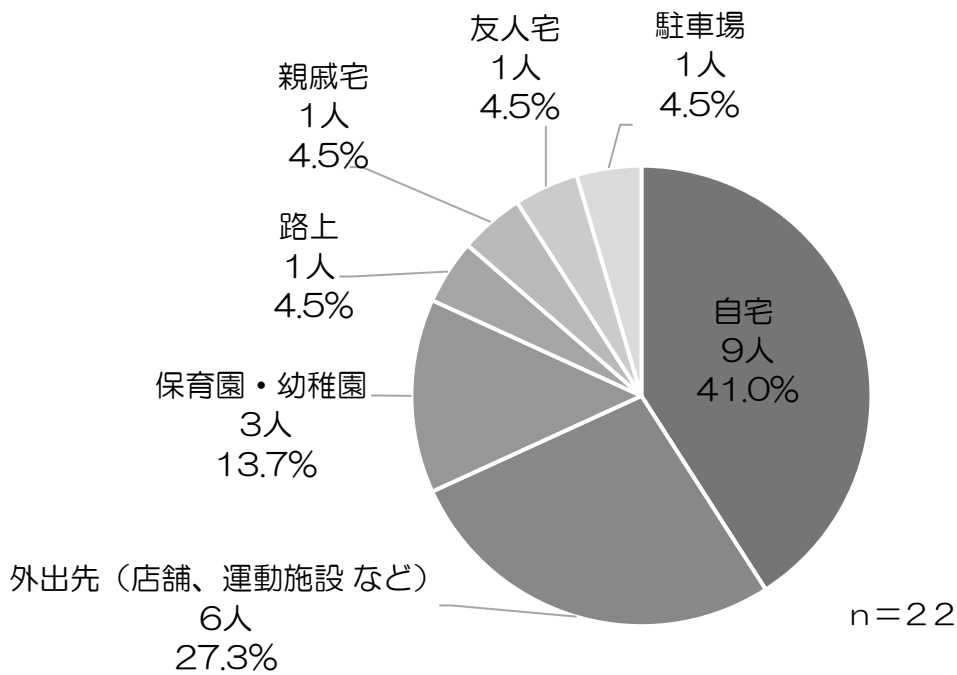


図7 発生場所別救急搬送人員（12歳以下）

7 事故事例

【事例1】

母親がドアを閉めた際に、蝶番側に息子の指が入っており切断した。
（12歳以下 中等症）

【事例2】

工事現場で電気のかぎりを使用し、資材を切断中に誤って手を切断した。
（40代 中等症）

【事例3】

自動車整備中にファンベルトに軍手が巻き込まれ人差し指の第一関節を切断した。（40代 中等症）

【事例4】

自宅トイレに入った際にトイレドアの隙間に手を置いていたところ、家族がトイレドアを閉めたため指が挟まり切断した。（70代 中等症）

乳幼児の窒息や誤飲の事故

1 年別搬送人員

平成26年から平成30年までの5年間に、6,224人の乳幼児が、窒息や誤飲等※により医療機関に救急搬送されています（図8）。飲み込んだものによっては、体の組織を破壊するなど重大な事故となる恐れもあります。

※耳や鼻等に入ったものも含む

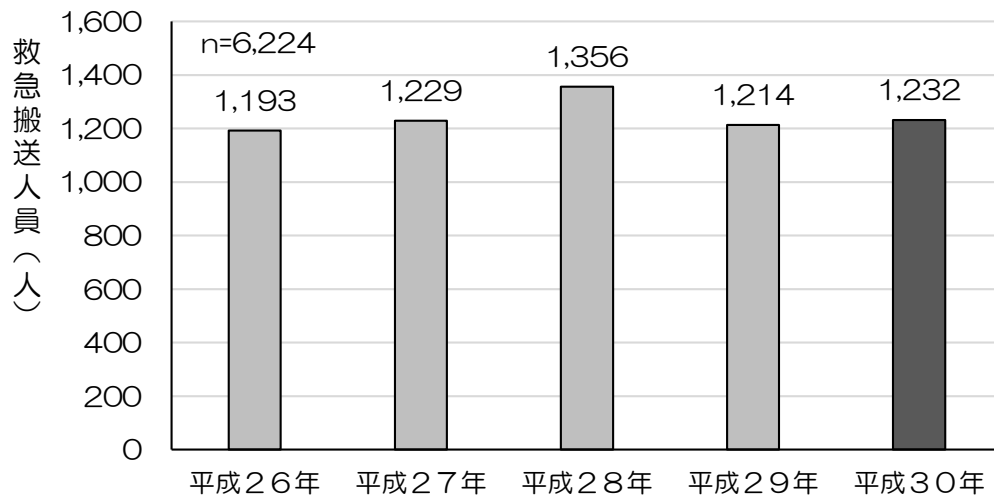


図8 年別の救急搬送人員

2 年齢別搬送人員

年齢別では、0歳児の救急搬送が最も多く、成長とともに減少しています（図9）。

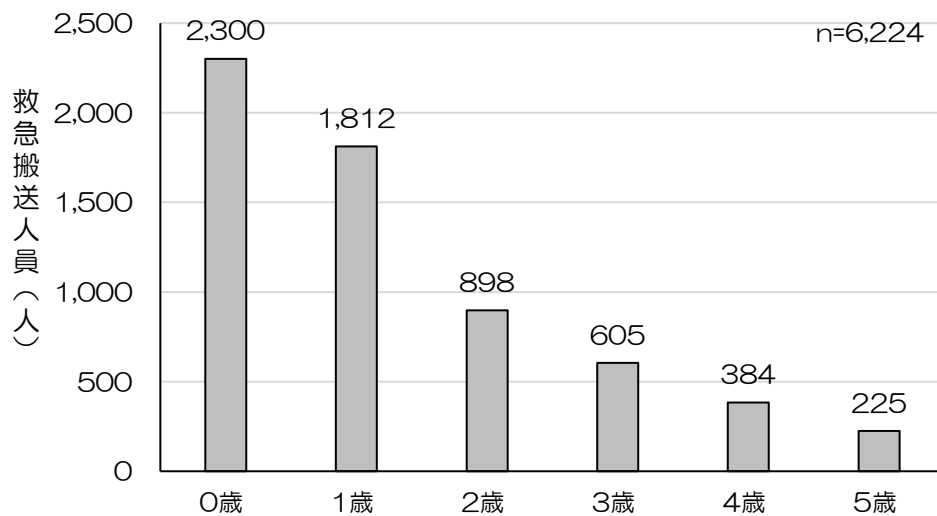


図9 年齢別救急搬送人員

3 発生場所別搬送人員

発生場所別では、住宅等居住場所が全体の9割以上を占めています(図10)。

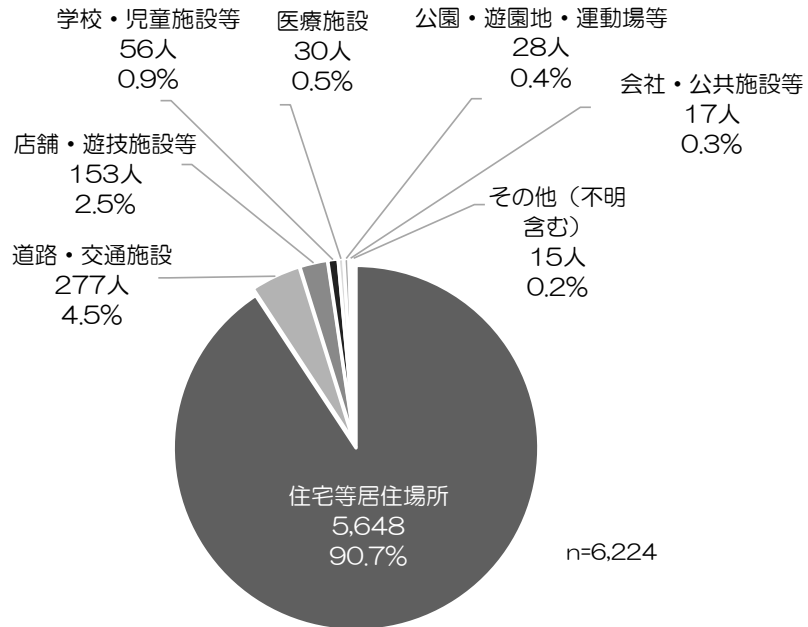


図10 発生場所別救急搬送人員

4 初診時程度別救急搬送人員

初診時程度別では、軽症が約9割を占めており、入院の必要がある中等症以上は約1割を占めています(図11)。

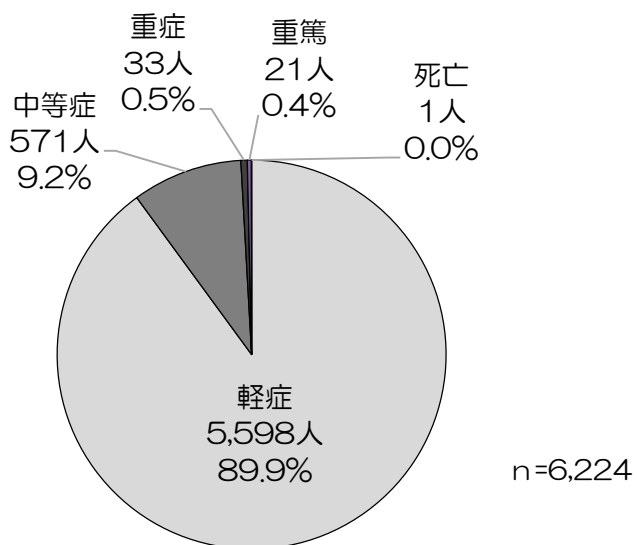


図11 初診時程度別救急搬送人員

5 関連器物別救急搬送人員

関連器物別では、食品・菓子や玩具が多いですが、乳幼児の窒息や誤飲に係る製品等は、菓子の包みやたばこ、薬剤等、様々です（図12）。

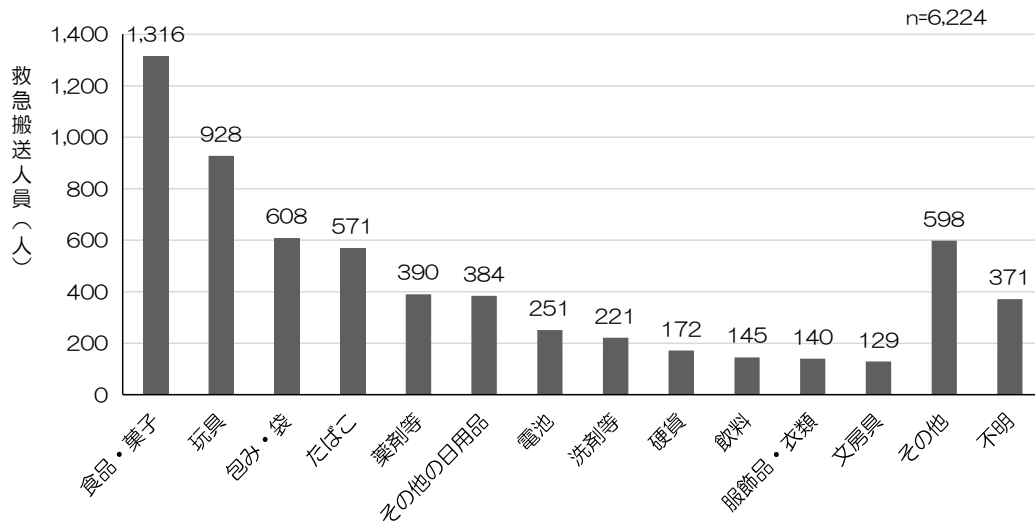


図12 関連器物別救急搬送人員

6 窒息や誤飲の事故の事例

【事例1】

親が少し目を離した際に、ミニトマトを喉に詰まらせ窒息した。
（3歳 重症）

【事例2】

電子たばこのカートリッジを誤飲してしまい、その後ミルクを飲んだ後に嘔吐があり、嘔吐物にたばこの葉が含まれていた。
（1歳 中等症）

7 窒息や誤飲の事故を防ぐために

- 家の中では、子供の目の高さで危険がないかチェックしましょう。
子供が飲み込めそうなものが、子供の手の届くところがないか日頃から整理整頓をこころがけましょう。

- 飲み込むと危険性が高いものを知っておきましょう。
ボタン電池：ボタン電池は放電能力が高いため、非常に短時間で消化管壁に潰瘍を作ります。また、直径が大きく食道にとどまる可能性が高いため、誤飲すると死に至るおそれがあります。
(出典：東京都生活文化局消費生活部生活安全課 ボタン型電池 コイン型電池を子どもにさわらせないで！ リーフレット)

- 灯 油：胃から逆流すると気管に入りやすく、気管に入るとひどい肺炎を起こします。キャンドルオイルも、これと同じ状況で、肺炎を起こします。



ピックアップ2

熱中症による救急搬送

1 年別・月別の発生状況

(→P.17事故種別「その他」等により救急搬送されたもの)

平成26年から30年の過去5年間(各年6月から9月)に22,015人が熱中症(疑い含む。)により救急搬送されています。平成30年の救急搬送人員は、7,960人で、65歳以上の高齢者の割合は、約5割を占めています(図13)。

また、月別では、各年とも7月、8月に多く発生していますが、梅雨時期の6月や残暑の9月にも発生しています(図14)。

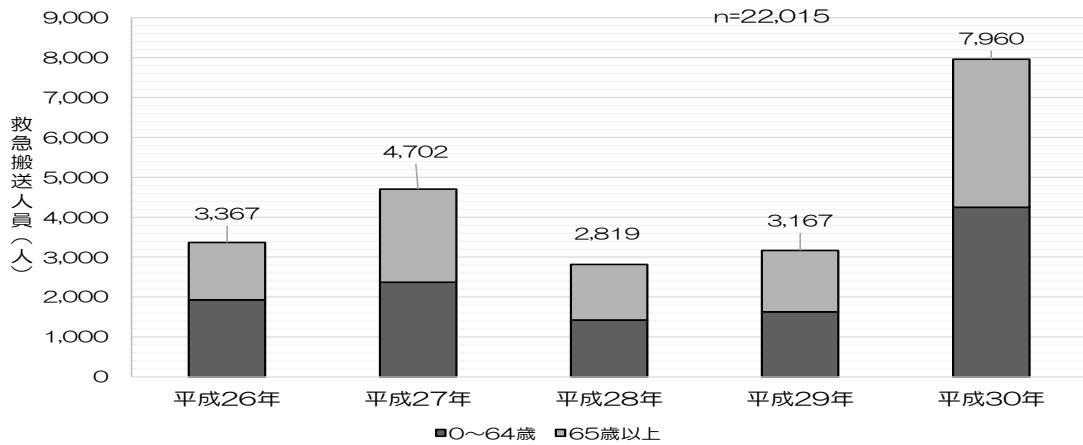


図13 過去5年間(各年6月~9月)の年齢層別の救急搬送人員

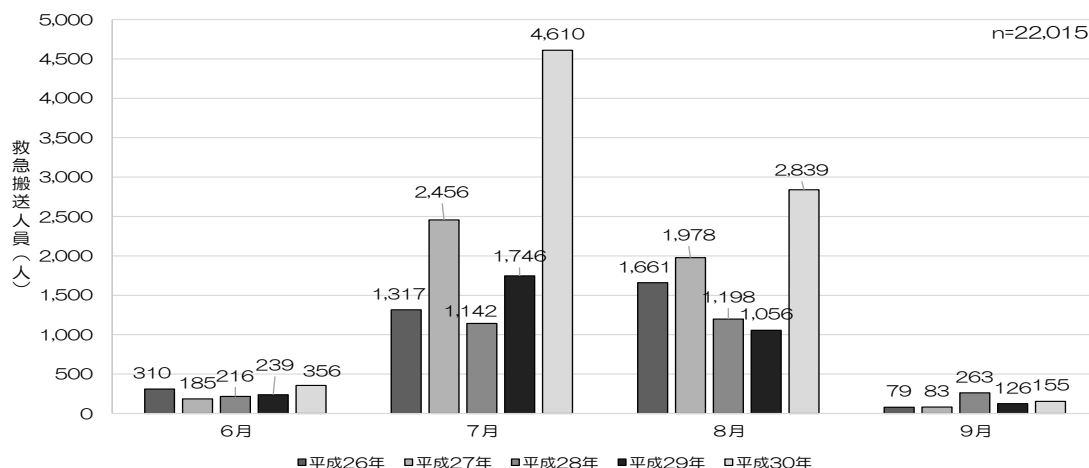


図14 過去5年間(各年6月~9月)の月別救急搬送人員

2 搬送人員と気温

熱中症による救急搬送人員と気温の関係をみると、気温が高い日が続いた7月前半や梅雨明け後の気温の高い日に多く発生しています（図15）。

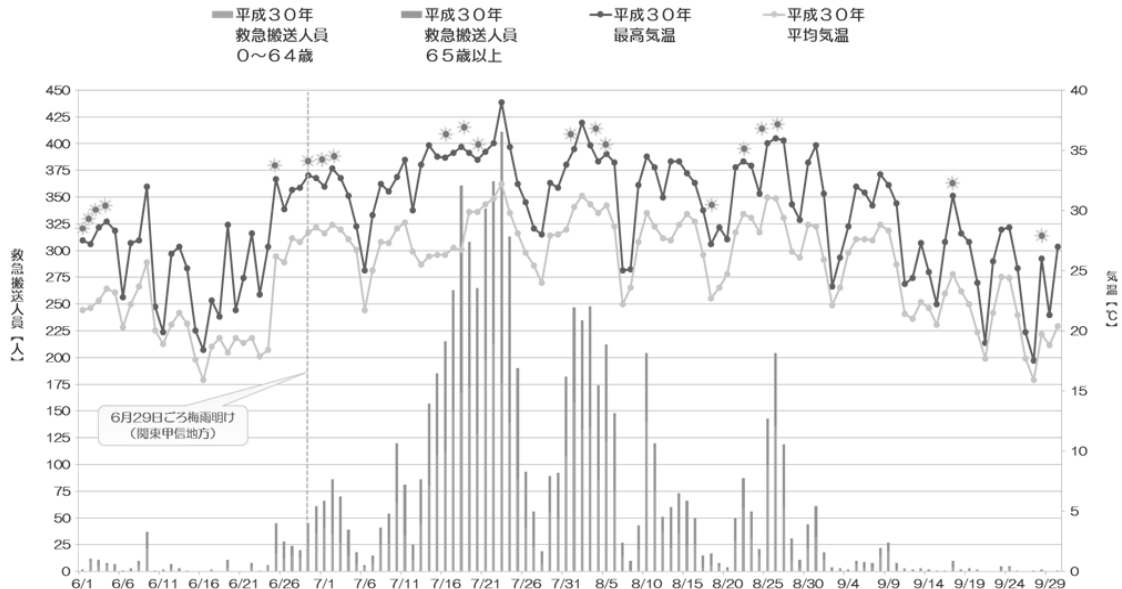
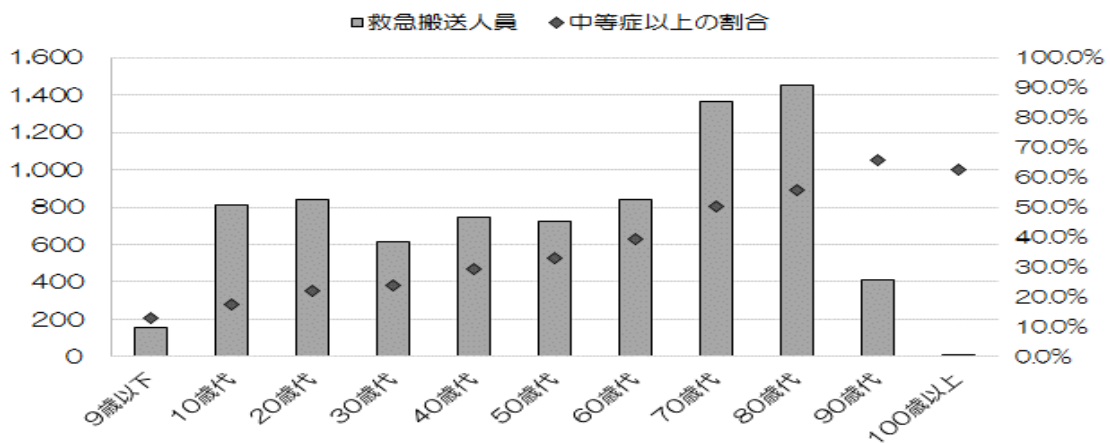


図15 救急搬送人員と気温（平成30年6月～9月）

3 年齢層別搬送人員と中等症以上の割合

熱中症による救急搬送人員と中等症以上の割合をみると、70代、80代の搬送が多く、加齢とともに中等症以上の割合が高くなっています（図16）。



	9歳以下	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	100歳以上
救急搬送人員	153人	810人	839人	615人	746人	723人	842人	1,363人	1,449人	412人	8人
中等症以上の割合	13.1%	17.4%	22.2%	24.1%	29.5%	33.1%	39.3%	50.2%	55.6%	65.5%	62.5%

図16 救急搬送人員と中等症以上の割合（%）（平成30年6月～9月）

4 発生場所別搬送人員

熱中症による救急搬送人員と発生場所をみると、住宅等居住場所での発生が最も多く、全体の約4割を占めています（図17）。

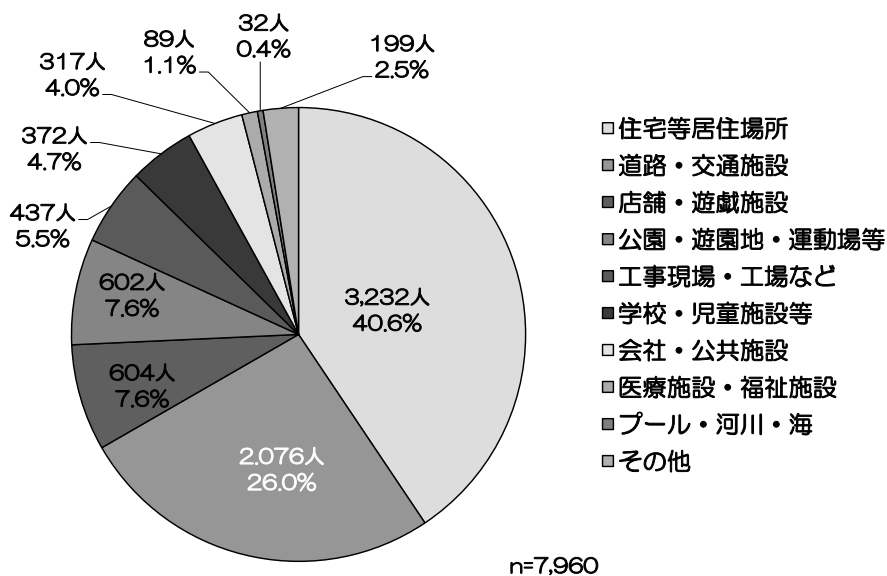


図17 発生場所別搬送人員（平成30年6月～9月）

5 熱中症の救急搬送事例

【事例1 乳幼児が車の中で熱中症になった事例】

保育園に子どもを迎えに来た母親は、車両後部座席のチャイルドシートに子どもを乗車させ、車両の鍵を車内に置いた状態でドアを閉鎖したところ車両ドアが施錠されてしまい、子どもが閉じ込められた。

（平成30年8月 1歳 軽症 気温31.1℃ 湿度72%）

【事例2 運動中に熱中症になった事例】

体育館でバレーボールの試合をしていた際に頭痛・嘔気があり、涼しい部屋に移動して休んでいたが症状が改善せず、嘔吐した。

（平成30年8月 10代 中等症 気温29.9℃ 湿度65%）

【事例3 室内で熱中症になった事例】

エアコンが壊れており、居室内の高温環境の中で過ごしている際に息苦しくなった。

（平成30年7月 80代 中等症 気温28.0℃ 湿度79%）

※ 気温、最高気温、平均気温、湿度は気象庁の気象統計情報の東京で測定した数値を使用しています。

6 熱中症予防のポイント

- 暑さに身体を慣らしていく。
- 高温・多湿・直射日光を避ける。
- 水分補給は計画的、かつ、こまめにする。
- 運動時などは計画的な休憩をする。
- 規則正しい生活をする。
- 乗用車等の車内の温度は短時間で高温になるため、子供だけにしない。
- 子供は大人よりも身長が低いため、地面から受ける輻射熱が高く、高温環境にさらされている。

7 応急手当

熱中症の応急処置

もし、あなたのまわりの人が熱中症になってしまったら……。
落ち着いて、状況を確認してから対処しましょう。最初の措置が肝心です。

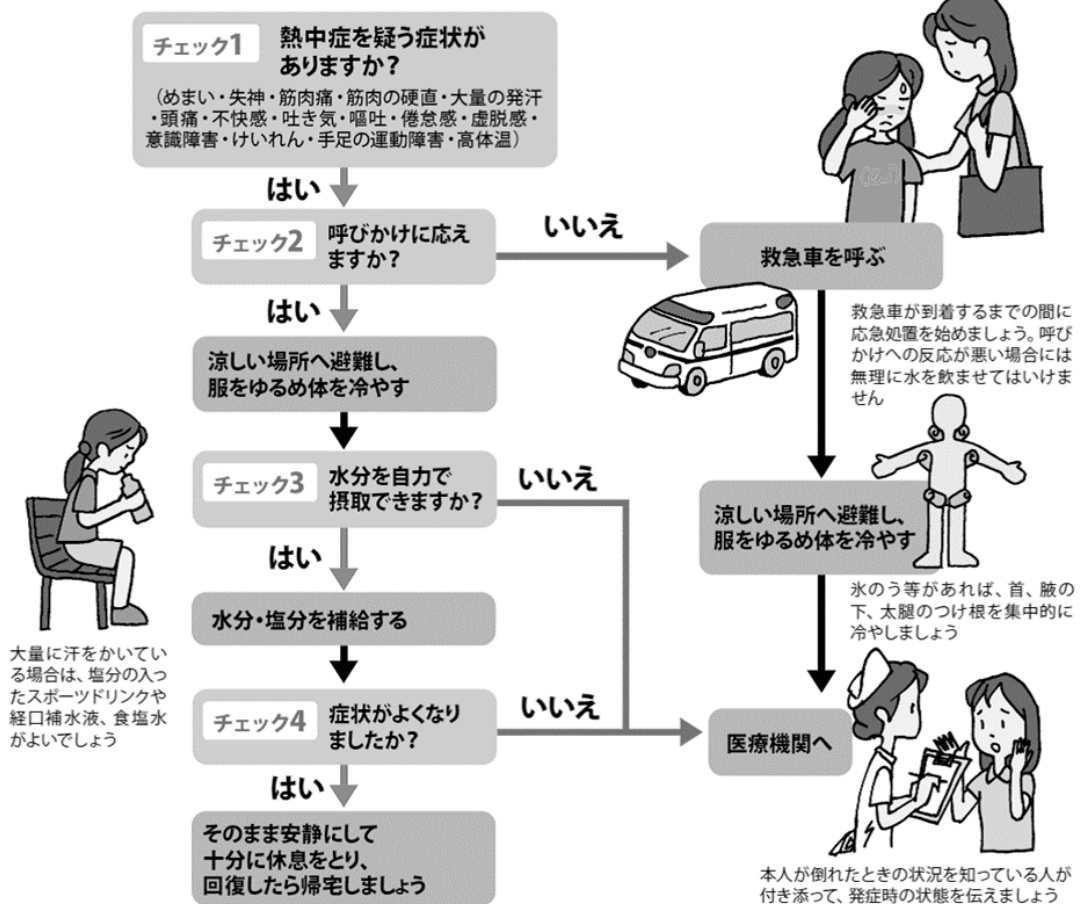


図2-7 熱中症を疑ったときには何をすべきか

※ 参考文献：熱中症環境保健マニュアル2018（環境省）